

# 清末に漢訳万国戦史が翻訳出版された背景と 万国戦史の意義

山 本 勉

はじめに

『万国戦史』が清末に当時の清で多く翻訳刊行されているのはすでに実藤恵秀などにより紹介されているが、その刊行の背景や訳者及び出版社などについてはほとんど触れられていない。本稿では、清そして現在の中国における刊行状況を総覧し以上のことを分析する。

- 1 清末の清の状況と万国戦史紹介の意義
- 2 訳者と日本との関係、訳者の経歴、中国での社会的地位
- 3 上海が刊行元に占める位置、清末の上海の位置

一 清末の状況と万国戦史紹介の意義

(1) 清末の状況

中国の半植民地化は、アヘン戦争後イギリスと1842年に結んだ不平等条約である南京条約に始まったと言える。南京条約により広州・福州・廈門・寧波・上海の5港を開港し、香港をイギリスに割譲、その後、フランスやアメリカとも同様の条約を結んだ。1858年にイギリス等4カ国と天津条約を結び、更に1860年には、イギリス・フランス・ロシアと北京条約を締結した。特にロシアは1840年のアヘン戦争、1856年のアロー戦争で弱体化した清に対して、愛琿条約（1858年）・北京条約（1860年）・イリ条約（1871年）を次々と締結し、清への南下政策を進めていった。国内においては洪秀全が中心となり太平天国の乱が起こり、更には列強による中国の領土や利権の争奪等、内憂外患を抱えた清はこうした危機的な状況を打開するため洋務運動を興したが、その理念が清朝の体制維持を目的とするものだったため中国の近代化は成し得なかった。

## (2) 万国戦史紹介の意義

清末の当時の留日留学生らによって、多くの書籍が中国語に翻訳出版され、翻訳をとおして欧米の思想や歴史・文学を学ぼうとしていたことが、実藤恵秀の『中国人日本留学史』や藤元直樹の『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』等に詳述されており、それらの著作や論文の中には漢訳された万国戦史のことも取り上げられている。藤元直樹の『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』には渋江保の著書が、漢訳・朝鮮語訳されたことについて次のように触れている。「『万国戦史』中の渋江の著作が清国、朝鮮で多く翻訳されていたことは、特に渋江の著作が優れていたからではなく、類書がほとんど見られなかったことに起因すると見るべきであろう。欧米、そして日本によって、亡国の危機にさらされていた朝鮮、清国にとり、世界史の動き、わけてもポーランドの事例は強い関心を持たれていたと考えられ、渋江のそれは彼の地において時宜を得た書物とされたと思われる。」<sup>(1)</sup> こうした多くの書籍の翻訳出版は、当時の清末中国が翻訳を通していち早く世界の動きを知ろうとした証左でもあり、漢訳万国戦史は時宜を得た書籍となったにちがいない。実際に、漢訳された『万国戦史』は二十四冊中限られた戦史であり、同じ巻数の『万国戦史』が複数の出版社から刊行されていることがわかっている。当時、万国戦史が漢訳出版されたことは、訳者や出版社が如何に渋江の著作をとおして当時の世界の状況をいち早く国民に知らせ、列強による瓜分の危機に直面していた清末中国に警鐘を鳴らそうとしていたかが伺える。

## 二 渋江保と清末中国人留学生の接点

### (1) 渋江保と清末中国人留学生

渋江と清末中国人留学生との接点を探る上で『抽斎歿後』に特筆すべき一文がある。『抽斎歿後』に「六月四日自今支那人劉成禺に就て支那語を研究す爾来三十八年七月に至るまで劉成禺常に来り教ふ」<sup>(2)</sup>とある。『抽斎歿後』によれば、渋江が劉成禺(1876～1953)に支那語を教えてもらっていた時期は、1902年(明治35年)6月4日から1905年(明治38年)7月までである<sup>(3)</sup>。劉成禺は北京大学の前身で1898年に創建された京師大学堂から1901年に日本に派遣される。その後、1904年に孫文の依頼を受けた横浜生

まれの馮自由の推挙で渡米しカリフォルニア大学に派遣されている。1911年、武昌蜂起勃発後帰国し辛亥革命に身を投じた。洪江は『抽斎歿後』に1905年（明治38年）7月まで劉成禺に支那語の教えを受けていると書いているが、劉成禺は1905年（明治38年）に渡米しているので実際には1904年迄と思われる。馮自由、劉成禺とともに著名な革命家の一人に馬君武がいる。『清国人の日本留学に関する一考察』によれば、日本において創刊された以下の雑誌の編集者に3人の名前が散見できる。『開智録』（1900年（明治33年）横浜創刊）には馮自由、『国民報』（1901年（明治34年）東京創刊）には馮自由、『湖北学生界』（1903年（明治36年）東京創刊）には劉成禺、『新民叢報』（1902年（明治35年）横浜創刊）には梁啓超とともに馬君武の名前が見られる。同論文によれば、『開智録』は「自由平等の真理を提唱」、『国民報』は「革命で清朝打倒と康（康有為：引用者）、梁（梁啓超：引用者）保皇党反対を目指した革命的な雑誌」、『新民叢報』は「民主主義を提唱」<sup>(4)</sup>とある。また『湖北学生界』も民主主義を目指した革命的な雑誌である。

## (2) 留学生、馬君武・馮自由・劉成禺

洪江保と馬君武・馮自由・劉成禺との関わりを示す書簡等の資料はこれまでのところ見つかっていないが、黄興濤の論文『《自省与「他者」明恩溥与清末民国时期的民族性改造话语》（〈自省と他者〉アーサー・エチ・スミスと清末中国時期の民族性改造語）の中で洪江と三人の関わりについて次のように述べている。「馬君武と同時か少し早く日本に留学した劉成禺や張繼煦（1876～1956）等が雑誌『湖北学生界』の創刊に関わり、1903年1月～2月に出版した創刊号においても、アーサー・エチ・スミスの『支那人気質』の日本語訳本に話が及んだ。」原文は以下の通りである。「与馬君武同时或稍早一些，游学日本的刘成禺、张继煦等参与创办了《湖北学生界》，在出版于一九〇三年一月至二月的创刊号上，也曾提到了明恩溥此书的日文译本。」<sup>(5)</sup>劉成禺とともに名前が掲載されている張繼煦は、『雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動』によれば「湖北省出身で1902年6月に官費生として弘文学院速成師範科に入学し、湖南出身の革命家黄興（1874～1916）と同時期に派遣された」<sup>(6)</sup>とある。黄興は日本に留学しており、1904

年に帰国し武装蜂起を企てているが発覚して日本に亡命し、宮崎滔天（1871～1922）を通じて孫文と交流、華興会と興中会を中心に反清朝を掲げる中国最初の政党中国同盟会を結成している。また、同論文の中で黄興濤は、「一九〇三年馬君武は既に英語やフランス語に通じていたが、彼が当時読んでいた『支那人気質』が英文の原本か、或いは洪江保が執筆した日本語本か、現時点では未だ判断する方法がない。たぶん、彼は英文・日文ともに曾て参照したことがあるだろう。中でも彼の日本語訳本への接触については、やはり劉成禺らの影響を受けた可能性がある。調査によると、1902年末から1903年初頭にかけて、馬君武・馮自由・劉成禺らは常に交流をしており、一緒に度々孫文を訪ねここから革命の道に入っていくた。また、劉成禺は正に上述した『湖北学生界』雑誌社の重要人物の一人である。日本の華僑出身者の馮自由も『支那人気質』の日本語翻訳者の洪江保をよく知っていたはずである。早1900年末には、馮自由は曾て『開智録』に洪江保著作の『仏国革命戦史』を翻訳したことがある。馮自由の父親の馮鏡如は正に『清議報』の名義上登記した「発行人兼編集者」であった。（梁啓超が裏で画策していた。）と述べている。原文は以下の通りである。「一九〇三年、馬君武已通英、法文字，他当时阅读的《中国人的气质》一书究竟是英文原本，还是涇江保的日译本，目前尚无法判断。很可能他两者都曾参读过，其中，他对日译本的接触还可能受到刘成禺等人的影响。据查考，一九〇二年底和一九〇三年初，马君武与冯自由、刘成禺等人经常交游，并一同多次拜访孙中山，从此走上革命道路。而刘成禺正是前文所提到的《湖北学生界》杂志社的重要人物之一，日本华侨出身的冯自由，也应当熟悉《中国人之气质》一书的日译者涇江保，早在一九〇〇年底，他就曾在《开智录》上翻译过涇江保著的《法国革命史》。而冯自由的父亲冯镜如，正是作为《清议报》名义上注册的“发行人兼编辑”（梁启超隐在幕后）。」<sup>(7)</sup> 原文にある〈法国革命史〉は、洪江の著作を総覧する限り第十八巻『佛國革命戦史』に間違いなからう。

### (3) 民権家、洪江保と書肆博文館

『抽斎歿後』に「明治三十二年七月三日、自今東京瓦斯株式会社の翻訳事務を担当す」、更に「八月二十九日東京瓦斯株式会社の翻訳事務に従事する

の約を解く」<sup>(8)</sup>とあり、東京瓦斯株式会社で五年余りの翻訳業務を行っていたことになるが、1903年（明治36年）に渋江が東京瓦斯株式会社における翻訳業務を解かれたことと、当時渋江が馬君武・馮自由・劉成禺ら清末の革命家と関わりを持っていたことは無関係ではないであろう。この点については更なる調査が必要であるが、渋江が博文館での最後の仕事となった『出世の葉続』の出版が1901年（明治34年）であることを考えると、渋江が博文館を辞した大きな理由がここにあると考えてもあながち間違いではないであろう。

### 三 『漢訳万国戦史』の概要

渋江保の代表作とも言える『万国戦史』は、『万国戦史概要』（別表1）にあるように、今わかっているものだけでも全24冊のうち14冊が中国語に翻訳され出版されている。このうち11冊は渋江が執筆したものである。国立国会図書館では1998年（平成10年）に「国立国会図書館電子図書館構想」を策定し古典籍資料の画像提供に着手、2001年（平成13年）に明治期刊行図書のデジタル化を始めた。渋江保の『万国戦史』も2011年（平成23年）にデジタル化されているが、中国においても少なくとも5冊が復刻マイクロ化されていることがわかっている。その中には、日本のデジタル化に先駆けて復刻マイクロ化されている『漢訳万国戦史』もある。これは隣国中国において渋江の『万国戦史』が今なお高い評価を得ている証左と言える。

万国戦史概要（別表1）

巻数	書名(上段) 総頁数(下段)	掲載執筆者(上段) 実質執筆者(下段)	出版年月日(西暦)(上段) 出版年月日(元号)(下段)	漢訳	復刻 マイクロ化	戦史テーマ
1	独佛戦史 322頁(広告掲載頁14頁含)	川崎三郎 (川崎三郎)	1894年9月28日 (明治27年9月28日)			列強間覇権争い
2	英清鴉片戦史 305頁(広告掲載頁24頁含)	松井廣吉 (渋江保)	1894年10月27日 (明治27年10月27日)	○	○	植民地獲得戦争
3	拿破崙戦史 506頁(広告掲載頁0頁)	野々村金五郎 (野々村金五郎)	1894年12月4日 (明治27年12月4日)	○		列強間覇権争い
4	英佛聯合征清戦史 315頁(広告掲載頁5頁含)	松井廣吉 (渋江保)	1894年12月31日 (明治27年12月31日)			植民地獲得戦争
5	トラファルガー海戦史 304頁(広告掲載頁12頁含)	越山平三郎 (越山平三郎)	1895年1月31日 (明治28年1月31日)			海戦

6	露土戦史 318頁 (広告掲載頁7頁含)	松井廣吉 (洪江保)	1895年2月28日 (明治28年2月28日)	○		植民地獲得戦争
7	米國南北戦史 320頁 (広告掲載頁7頁含)	松井廣吉 (洪江保)	1895年3月26日 (明治28年3月26日)	○		人権戦争
8	普墺戦史 336頁 (広告掲載頁3頁含)	洪江保 (羽化生 洪江保)	1895年5月15日 (明治28年5月15日)	○		列強間覇権争い
9	ナイル海戦史 302頁 (広告掲載頁5頁含)	越山平三郎 (越山平三郎)	1895年6月18日 (明治28年6月18日)	○		海戦
10	波蘭衰亡戦史 329頁 (広告掲載頁3頁含)	洪江保 (羽化生 洪江保)	1895年7月16日 (明治28年7月16日)	○	○	植民地獲得戦争
11	クリミア戦史 329頁 (広告掲載頁7頁含)	松井廣吉 (洪江保)	1895年8月18日 (明治28年8月18日)			植民地獲得戦争
12	印度蚕食戦史 356頁 (広告掲載頁3頁含)	洪江保 (洪江保)	1895年9月20日 (明治28年9月20日)	○		植民地獲得戦争
13	英米海戦史 314頁 (広告掲載頁9頁含)	越山平三郎 (越山平三郎)	1895年10月17日 (明治28年10月17日)	○		海戦
14	伊太利独立戦史 334頁 (広告掲載頁3頁含)	松井廣吉 (洪江保)	1895年11月19日 (明治28年11月19日)	○	○	独立戦争
15	米國独立戦史 331頁 (広告掲載頁4頁含)	洪江保 (洪江保)	1895年12月19日 (明治28年12月19日)	○	○	独立戦争
16	希臘独立戦史 308頁 (広告掲載頁10頁含)	柳井録太郎 (洪江保)	1896年1月23日 (明治29年1月23日)	○		独立戦争
17	英國革命戦史 328頁 (広告掲載頁7頁含)	洪江保 (羽化生 洪江保)	1896年2月17日 (明治29年2月17日)	○	○	革命戦争
18	佛國革命戦史 336頁 (広告掲載頁6頁含)	洪江保 (洪江保)	1896年3月20日 (明治29年3月20日)	○		革命戦争
19	三十年戦史 338頁 (広告掲載頁8頁含)	国府犀東 (国府犀東)	1896年4月24日 (明治29年4月24日)			古代戦史
20	フレデリック大王七年戦史 352頁 (広告掲載頁4頁含)	洪江保 (洪江保)	1896年5月18日 (明治29年5月18日)			国内統一戦争
21	シーサルボンベローマ戦史 334頁 (広告掲載頁8頁含)	岸上質軒 (岸上質軒一 部を洪江保)	1896年6月26日 (明治29年6月26日)			古代戦史
22	羅馬、加達額爾 ピュニック戦史 333頁 (広告掲載頁4頁含)	洪江保 (洪江保)	1896年7月19日 (明治29年7月19日)			古代戦史
23	歴山大王一統戦史 326頁 (広告掲載頁9頁含)	洪江保 (洪江保)	1896年8月17日 (明治29年8月17日)			古代戦史
24	希臘波斯戦史 325頁 (広告掲載頁9頁含)	洪江保 (洪江保)	1896年9月24日 (明治29年9月24日)			古代戦史

## 四 『漢訳万国戦史』 訳者

『漢訳万国戦史』には日本とかかわりの深い訳者の存在がある。現時点でわかっている訳者と日本との関わりについて述べ、『漢訳万国戦史訳者一覧

表』(別表2)を付した。

(1) 湯叡 (1878年～1916年)

①湯叡について

湯叡、(字は覚頓)は、万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』(英人強賣鴉片記)、万国戦史第六巻『露土戦史』(露土戦紀)の翻訳者である。湯叡は、若い頃、維新変法思想を宣伝し人材を養成する根拠地の万木草堂で康有為に師事し戊戌変法に参画している。戊戌変法後、日本に渡り、1898年、孫文や馮鏡如らが開校し清朝改革派の拠点となった横浜大同学校(現、横浜山中華学校)で教員を務めた。1900年中国に密かに帰国し反清武装蜂起である「自立軍起義」に参加したが、武装蜂起失敗後再び日本に亡命する。1912年(民国元年)中華民国成立後、財政部顧問・中国銀行総裁を歴任する。1916年4月12日、広州海珠の警察署内で連絡会議に出席時襲撃を受けて命を落とした。

②湯叡と横浜大同学校

日本における湯叡の動向は現時点ではわかっていないが、深澤秀男の『変法運動と日本横浜中国大同学校』や于海英の『清議報及びその周辺』の論文等から、湯叡は横浜大同学校の創設に関わっていたことがわかる。

『変法運動と日本横浜中国大同学校』には「日本横浜中国大同学校は、光緒二四年(一八九八年)二月上旬、横浜居留地一四〇番地に、中国の華僑の子弟の教育と中国を救う人材の養成を目標として創設された。」<sup>(9)</sup>とある。『清議報及びその周辺』に「一八九六年の冬、横浜の華僑鄭汝磐、馮鏡如らは、華僑の子弟のために、学校(はじめは「中西学校」と命名する)を創設することを考え、孫文に相談した。孫文はもともと梁啓超を推薦して、教員とすることを欲したが、康有為は、梁が『時務報』の主筆に任ぜられていたので、梁の代わりに徐勤を推薦した。そして、康有為は徐勤を推薦しただけでなく、弟子の陳黙庵(陳汝成)、陳蔭農(陳和沢)、湯覚頓(湯叡)三人を派遣し、中西の二字は雅ではないといって、校名も大同学校と改め、大同学校の四字の門額を親書して送った。」<sup>(10)</sup>とある。こうした経緯から、湯叡は教習として横浜中国大同学校に勤務したのであろう。『変法運動と日本横浜中国大同学校』掲載の「日本横浜中国大同学校の参加者」には、湯叡が湯覚頓として

掲載されており、学校における役割には「教習」とあるほか、「官職又は派別等」には「変法派」とある。この表には、湯叡の他に、馮自由、馮鏡如、孫文、康有為、梁啓超の名前が散見できる他、名誉校長として犬養毅、賛成者として、宮崎寅藏や大隈重信も名を連ねている。犬養毅が参加者の中に見られるのは、孫文ら革命派と康有為ら変法派の提携のためによる。『清議報及びその周辺』に「一八九九年晩春から初夏にかけて、犬養毅は早稲田の私邸に孫文と陳少白、梁啓超、宮崎寅藏、柏原文太郎ら数人を招待し、康孫両派が連合し、ともに国事にあたるよう斡旋したという。」<sup>(11)</sup>とある。

### ③湯叡と『漢訳万国戦史』

万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）と万国戦史第六巻『露土戦史』（露土戦紀）の序文は梁啓超によるものである。万国戦史第六巻『露土戦史』の序文で、梁啓超は次のように訳者である湯叡を紹介している。「ああ、湯覚頓がロシアとトルコのことを翻訳し終えたので、諸国一門に知らせ、我が四万の人民に告げたいと思う。」原文は以下の通りである。「嗚呼吾願取湯君覚頓筆譯俄土之事懸諸國門以為我四萬萬人告也」<sup>(12)</sup> また、19世紀後半から20世紀中期のロシア史・ソ連史の翻訳紹介を研究した于沛の論文『中国世界史研究译介时期的俄苏史』に、梁啓超が万国戦史第六巻『露土戦史』（露土戦紀）に寄せた序文を以下のように取り上げている。「《俄土战记》, 汤睿译, 大同译书局 1897 年出版。梁启超为此书作《俄土战记序》, 1898 年 2 月 11 日, 在《时务报》发表。梁启超认为土耳其衰亡的主要原因有以下两点: “内治不修” 和 “外交不慎”。这和 19 世纪末的中国十分相似。沙皇俄国不仅要侵占土耳其, 而且 “欲得志英人強賣鴉片記于东方者数百年”, 其野心始终没有改变。西方列强争霸, “并心注力于中国”。在民族危机面前, 清政府却 “倚强盗以作腹心, 引饿虎以同寝食” 在国难当头之际, 让中国人民将 “俄土之事, 悬诸国门”, 时时警觉, 这是十分有必要的。」<sup>(13)</sup> 于沛も取り上げているように、梁啓超は序文において、トルコ衰亡の主な原因を「内政の混乱」（“内治不修”）と「外交の失敗」（“外交不慎”）の2点であるとし、当時の中国清末の人民にロシアに警戒心をもって当たることが重要であると訴えている。于沛の論文の括弧で囲ったセンテンスは、全て『漢訳露土戦紀』の序文から抜粋したもので

あるが、「欲得志英人強賣鴉片記于东方者数百年」（東洋に志を得ようとする者が既に数百年も企んでいて）の中の「英人強賣鴉片記」については、序文にはなく、于沛が万国戦史第二卷『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）をセンテンスに挿入誤記したと思われる。

梁啓超は、万国戦史第二卷『英清鴉片戦史』の序文においても、万国戦史第六卷『露土戦史』（露土戦紀）同様に湯叡のことを紹介している。山口大学図書館には、万国戦史第二卷『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）が所蔵されており、同書の巻末の大同書局各種書目に『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）の書名が、第三卷『拿破崙戦史』（拿破崙戦史）・第六卷『露土戦史』（露土戦紀）・第七卷『米國南北戦史』（美国南北戦史）・第十三卷『英米海戦史』（英米海戦史）と共に散見出来る<sup>(14)</sup>。大同書局各種書目には『希臘自主戦史』の記載が見られるが、万国戦史第十六卷『希臘独立戦史』であるかどうか、現時点ではわかっていない。河南省数字図書館には『英人強賣鴉片記8卷』（上海大同訳書局1898年）が確認でき、更に、長春数字図書館や中国国家図書館にも同様のものがあることがわかっている。万国戦史第二卷『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）については、沢谷昭次の論文、『英人強賣鴉片記』をめぐって』（山口大学教養部紀要）があり、『漢訳万国戦史』研究の上で貴重な資料と言える。

万国戦史第六卷『露土戦史』（露土戦紀）については、『蔡元培全集15卷』に「夜译「俄土战史」数叶。有文从字顺之乐」（夜『露土戦史』を日本語に数頁訳した際に文章を流暢に読む楽しみが持てた。）<sup>(15)</sup>とある。なお、この日記は1898年7月9日に書かれたものと思われる。この日記については、李海の『梁啓超研究 その日本滞在期を中心に』においても触れており、蔡元培が万国戦史第六卷『露土戦史』（露土戦紀）をとおして日本語を勉強していたことが読み取れる<sup>(16)</sup>。また、『明治期の日本社会における露土戦争の認識』において「とりわけ当時の国内最大出版社である博文館がエルトゥール号事件勃発後の1890年に、万国歴史全書の第5巻として北村文夫『土耳其機史』を刊行し、日清戦争開戦の年1894年から翌々年にかけて全24巻からなる万国戦史の刊行を行い、この叢書内に松井廣吉（柏軒）による『土露戦史』（1895年）、『クリミア戦史』（1895年）を出版したことは当時の日本

社会において露土戦争に関する共通認識が醸成され関心を集めた証左となっている。」<sup>(17)</sup>とあるように露土戦争のことについては当時、強く意識されていたことが読み取れる。ここに記載の「松井廣吉（柏軒）による『土露戦史』（1895年）、『クリミア戦史』（1895年）」の実質執筆者は、言うまでもなく渋江保である。

万国戦史第六卷『露土戦史』の漢訳本については、大同譯書局から出版された『露土戦紀』の他に、東京大学総合図書館所蔵の『俄土戦史』がある。『俄土戦史』の目次は万国戦史第六卷『露土戦史』と全く同じであることから、万国戦史第六卷『露土戦史』を漢訳出版している。『俄土戦史』の表紙に「袁嘉穀署」<sup>(18)</sup>とあるので、翻訳者は袁嘉穀ではないかと思われる。袁嘉穀は1904年（明治37年）に日本を訪れ、1905年には北海道にも足を伸ばしている。『袁嘉谷先生評傳 紀念袁嘉谷先生逝世六十週年』には「光緒三十年（公元一九〇四年），袁嘉谷奉派到日本考察教育兼任雲南留日學生監督。日本自明治維新后的一切教育措施，都使他受到啓發：國家的富強要靠人材，人材的培養要靠教育。他在日本購買了許多書籍（包括百科全書）捐給雲南省學堂。一九〇五年筱圃先生赴日本考察學政，與袁嘉谷同往北海道參觀，共同研討日本學務。」<sup>(19)</sup>とあり、日本で多くの書籍を購入し人材の養成のために教育が必要であることを袁嘉穀は訴えている。版權には「光緒三十四年七月出版 編譯者 編書局 校改者 伍銓萃 邵恆濬 印刷局 益森印刷局 總發行所 京師五道廟售書處（定価銀元二角）」<sup>(20)</sup>とあり、校改者として伍銓萃と邵恆濬の名前が記載されているが、このうち伍銓萃は、1909年（清宣統元年 明治42年）に視察で日本を訪れている<sup>(21)</sup>。また、この『俄土戦史』には、「寄贈 中華民國公使館 大正十三年十一月七日」<sup>(22)</sup>との公印がある。当時、中華民國公使館は現在の東京都千代田区永田町二丁目、国会議事堂付近にあった。

## (2) 陳澹然（1859～1930）

万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』の翻訳者である。列強の侵略と清朝の国勢が日増しに衰えることに直面し「遷都建藩」の建議を提出し、『遷都建議議』を執筆、朝廷を湖北省荆州市に移すことを呼びかけた人物である。安徽通志

館館長や安徽大学に招聘され中国通史を教授している。

邹振环の『晚清波兰亡国史书写的演变系谱』には『亡国危机日益深重,在“亡国史鉴”高潮中,日本学者涩江保的《波兰衰亡战史》进入中国,在1901年至1904年间先后出现了三种译本:一为1901年译书汇编社所译出的第一册本;二为1902年江西官报社推出的陈澹然译述《波兰遗史》;三为1904年东大陆图书译印局印刷、上海镜今书局发行的薛公侠译述的《波兰衰亡史》。』<sup>(23)</sup>とあり、渋江保の万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』が1901年(明治34年)～1904年(明治37年)の間に漢訳万国戦史として3種類翻訳出版されたことが見て取れる。このうち、東京都立中央図書館には譯書彙編社発行『波蘭衰亡戦史第一冊』が蔵書として所蔵されている。表紙には「日本澁江保著」、小引三頁には、「明治二十八年四月 著者 羽化生誌」とある。版權には「明治卅四年十一月廿七日印刷 明治卅四年十一月三十日発行」、「編輯兼発行者 譯書彙編社」<sup>(24)</sup>とあるので、邹振环の指摘したとおりである。二冊目の1902年(光緒28年、明治35年)に江西官報社から出版された陳澹然翻訳の『波蘭遺史』については未見である。『波蘭遺史』については、「Bai百科」の陳澹然の説明の注に「参考资料1. 陈澹然. 波兰遗史:安徽印刷局, 1914:6」<sup>(25)</sup>とあり、更に、国家図書館古籍館普通古籍閲覧室には「澁江保撰 陳澹然訂 波蘭衰亡遺史普通古籍一卷 鉛印本 1916年民国5年」<sup>(26)</sup>が所蔵されていることがわかっている。それぞれ出版年は異なるが、万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』と思われ、たびたびの再版があったと推察される。三冊目の1904年(明治37年)に上海鏡今書局から出版された薛公侠『波蘭衰亡史』については未見であるが、国家図書館全国図書館文献縮微中心には、同『波蘭衰亡史』が2017年、マイクロフィルム化されたものが所蔵されている。国家図書館全国図書館文献縮微中心によれば、『波蘭衰亡史』の訳者、薛公侠については「訳者通称:薛公侠」<sup>(27)</sup>とあり、「(日)澁江保原著;薛蟄龍訳述」<sup>(28)</sup>とも記載が見られる。薛公侠と薛蟄龍は同一人物であるのか。寇振鋒の『『三十三年目の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について』に『『三十三年落花夢』の漢訳については、「恭公全侠口述」との指摘もある。この「恭公全侠」はおそらく薛蟄龍の号である「公侠」の全称であると考えられる。(中略)この薛蟄龍はまた自ら、明治-大正時代の小説家であり、かつ翻訳家で

もある澁江保編『波蘭衰亡史』をも漢訳し、1905年にまた、小説『離恨天』上下冊を訳述した。」<sup>(29)</sup>とある。これより、薛公俠と薛蟄龍は同一人物であることは間違ひなからう。また、山口大学図書館の蔵書、万国戦史第二卷『英清鴉片戦史』（英人強賣鴉片記）卷末の大同書局各種書目に『波蘭滅亡記』<sup>(30)</sup>が散見出来る。『波蘭滅亡記』については梁啓超が3頁に渡って飲冰室専集之十四<sup>(31)</sup>に書いているが、この『波蘭滅亡記』が果たして万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』であるかどうか、現時点ではわかっていない。

万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』について最も特筆すべき点は、コミュニティーサイト『豆瓣』の『汪笑依的新编京剧《瓜种兰因》』に「这是历史上第一出根据外国史事改编的京剧，原定共16本，后来只演出了3本，而第一本13场光绪三十二年（1906年）曾在《警钟日报》上连载。其原名《瓜种兰因》，后改名《波兰亡国惨》，这里的“瓜”有种瓜得瓜，种豆得豆的意味，又暗喻波兰被瓜分的历史，因指因果，兰则指波兰，系1904年8月根据日人澁（涩）江保所作的《波兰衰亡战史》改编而成，原书完成于1895年。涩江保的父亲即日本近代史上著名的汉学家涩江抽斋，家族世代为弘前藩藩医，涩江保本人是日本近代著名翻译家，曾在博文馆等出版社出版各种译著多达百五十部」<sup>(32)</sup>とあるように、1904年（明治37年）に、京劇史上初めて海外のことを演目として汪笑依が演出した『瓜种兰因』が、万国戦史第十卷『波蘭衰亡戦史』を改編したものだと言うことだ。以上のことから、澁江の著作が漢訳された書籍の他、大衆演劇である京劇をとおしてまで清末の中国に多くの影響を与えていたかがわかる。

### (3) 汪郁年

万国戦史第十二卷『印度蚕食戦史』（印度蚕食戦史）の翻訳者である。「陳独秀早年事遺的新資料」に、1901年4月3日創刊された翻訳刊行物『励学譯編』第一期に訳者のひとりとして次のように名前が散見出来る。「《励学译編》（The Translatory Magazine）是20世纪初我国早期翻译刊物之一，1901年4月3日（光绪二十七年二月望日）创刊，在苏州出版。这一月刊为吴县汪郁年、戴昌煦等所倡设的励学译社主办，“采东西学术、格致诸学”，各译全书，分期连载」<sup>(33)</sup>また、『包天笑文學活動側影：編輯生涯述略』においても同様

の記載が見られ、「我們現在所看見的其中篇目有《歐州近代史》、《印度蠶食戰史》」<sup>(34)</sup>と万国戦史第十二卷『印度蚕食戰史』（印度蠶食戰史）書名が散見できる。更に、『译林 在中国学术界留下的印记』には『除一种外均为博文馆出版，或许其中存在某种原因。第一期开译涩江保《印度蚕食战史》后，因苏州的励学社称已将其全书译完，故仅译两叶即戛然而止。』<sup>(35)</sup>とある。ここから、『訳林』で翻訳掲載された書籍の殆どが博文館の手がけた物であることがわかる。実際にこの論文には、博文館から当時出版され、『訳林』に掲載された鎌田栄吉『欧美漫游记』（欧米漫遊雑記）等の書籍が記載されている。興味深いのは、訳林の第一期において渋江の万国戦史第十二卷『印度蚕食戰史』を訳し始めたが、励学社が既に『印度蚕食戰史』を訳し終えたので、2頁ほど訳して途中でやめてしまったとの記載があることである。また、『清史鏡鑑：部级领导干部清史读本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』には「《译林》一至十期刊载翻译的外国史著述有：《印度蚕食战史》、《世界商业史》、《明治法制史》、《日本近世名人事略》、《维多利亚大事记》等。」<sup>(36)</sup>とあり、『印度蚕食戰史』が確認できる。これらの資料から、漢訳出版された『印度蚕食戰史』は、励学社と訳林のものと2種類あることがわかる。実藤恵秀監修『中国譯日本書綜合目録』には、「印度蠶食戰史 澁江保（著）汪郁年（譯）杭州譯林館〔1911年前板〕」と<sup>(37)</sup>の記載が見られるが、汪郁年翻訳の『印度蚕食戰史』は励学社版であり、もし、譯林館から出版されたのであれば、1901年と考えるのが妥当であろう。現存する『漢訳印度蚕食戰史』の存在を現時点では確認できていないが、『国学大師』のホームページには、「《印度蠶食戰史四卷》作者 日本羽化生・日本澁江保撰・清汪鬱年譯・版本 清光緒二十七年鉛印本影印 检索该书影印古籍」<sup>(38)</sup>とあり、確かに『漢訳印度蚕食戰史』は存在していた。渋江が『印度蚕食戰史』を博文館から出版したときに、どのような思いで書名を付けたのか、そこに渋江思想を見て取れる。「蚕食」とは、所謂「領土を蚕食する」意であり、清末の革命家や翻訳家が書名に大いに興味をそそられたことは察して余りある。汪郁年は汪榮宝・李志仁・馬仰禹と共に日本に留学しているが日本における活動の詳細は現時点ではわかっていない。

(4) 蔣維喬 (1873 ~ 1958)

万国戦史第十八卷『佛國革命戦史』（佛國革命戦史）の翻訳者であり、教育者・哲学者・仏学者・養生家でもある。その『日記』は1896年から1958年までの仕事、生活、研究、遊歴や養生、修行の経歴について大量に記録されているが未見である。蔣維喬は日本留学後、蔡元培などに招かれ愛国学社で教え愛国女校の専任となる。また1903年商務印書館の教科書を編集し始め編訳所に入所、教科書編集のかたわら、愛国女校、商務印書館経営の小学師範講習所、尚公小学などで教育の実践をしている。

夏晓虹は『晚清女性与近代中国 第七章接受过程中的演绎』においてフランス革命期の指導者ロラン夫人を取り上げている。その中で洪江保の『佛國革命戦史』の訳が二種類（人演社と商務印書館）あることが以下のように指摘されている。「三月和四月涇江保所著《法国革命战史》的两个中译本接踵问世，商务印书馆推出的一种，署为“中国国民丛书社译”，人演译社社员“翻译，该译社出版的一版本，书名直接承袭了日文本，题为《法国革命战史》」<sup>(39)</sup>ここに記載の「三月和四月」は、この文章の前後関係から、1903年であることがわかる。つまり、万国戦史第十八卷『佛國革命戦史』（佛國革命戦史）は、1903年3月と4月に続けて矢継ぎ早に漢訳出版されたことになり、その関心の高さが見て取れる。「人演译社社员“翻译”となっているが、人演社社員が誰であったのか次の資料に明記されている。叶舟の『馆史近代知识群体的典型代表：商务印书馆的“常州帮”』には、「光绪二十九年（1903）年初，蔣維喬再次来到上海，偕妻子入住爱国学社，顺便学习英文。也就是这时，他的同乡庄俞、严保诚、汤中、胡君复、谢仁冰、徐寓等也来到上海创办人演社，编译日文书籍。蔣維喬虽然不是人演社的正式成员，但是人演社最出名的出版物便是蔣維喬翻译的日人涇江保著《佛国革命战史》，这也是近代中国较早介绍法国大革命的著作。」<sup>(40)</sup>とある。ここにあるように、人演社の有名な出版物として蔣維喬の翻訳した『佛國革命戦史』が挙げられている。この資料によれば、蔣維喬は人演社の正式な社員でないことがわかる。更に、史革新の『晚清西学东渐与新史学的发轫』に漢訳された『法国革命战史』が商務印書館と人演社の二社から出版されたことが記載<sup>(41)</sup>されている。

(5) 趙天驥

万国戦史第八卷『普奥戦史』（普奥戦史七編 附録一編）の訳者である。東洋文庫には漢訳された『普奥戦史七編 附録一編』が所蔵されており、表紙には『戦史叢書 第一集 第一編 普奥戦史 上海商務印書館印行』、目次に続いて『日本羽化生原著 桂林趙天驥 東湖王慕陶校』とある。版權には「光緒二十八年十二月首版 原著人 日本羽化生 譯述者 桂林趙天驥 校閱者 東湖王慕陶校 發行者 商務印書館 印刷所 上海鐵馬路橋北錢業會館西文昌閣隔壁 商務印書館 總發行所 商務印書館」<sup>(42)</sup>とある。訳者の趙天驥、校正者の王慕陶についてもその経歴はわかっていない。王慕陶については、清末小説 第16号の『檢證：商務印書館・金港堂の合辦（三）』に名前が散見出来るが、やはり詳細はわからない。

(6) 薩憂敵、薩夏厥

この二人に共通する点は、万国戦史第十七卷『英国革命戦史』（英国革命戦史）の漢訳翻訳者である。「五『漢訳万国戦史』と出版社」でも詳細は触れるが、薩憂敵訳の漢訳『英国革命戦史』は、支那繙譯会社から出版されている。この点について、史革新の『清史鏡鑒：部級领导干部清史读本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』に「作新社，出版《英国革命战史》、《哥萨克东方侵略史》、《朝鲜政界活历史》等译著。」<sup>(43)</sup>と他の著書と共に記載が見られる。史革新が触れている作新社は印刷所の作新社印刷局であるのか、漢訳『美国独立戦史』を発行した作新社図書局であるのか確認ができていない。漢訳『美国独立戦史』の版權によれば、漢訳『美国独立戦史』の訳者兼発行者は「上海英租界四馬路五十五号、作新社図書局」であり、印刷所は「上海英租界四馬路五十三号、作新社印刷局」である。また、総販売所は、「上海四馬路老巡捕房東首、作新社」<sup>(44)</sup>となっている。この漢訳『英国革命戦史』は、2005年（平成17年）にマイクロ化されたものが全国図書館文献縮微中心と河南省図書館に所蔵されていて、「著者、澁江保、訳者、薩憂敵」との記載がある。また、「接続附注」に「Reproduction of 英国革命战史 专著【上海】支那翻譯会社【发行】光緒29【1903】87頁22cm全书4編，内容包括英国革命之原因及英国之战」<sup>(45)</sup>とある。薩憂敵訳の漢訳『英国革命戦史』は、

1940年（民国29年、昭和15年）にも、支那繙譯会社から出版されていることが河南省数字図書館で確認できる。薩夏廠の漢訳『英国革命戦史』についても同様に河南省数字図書館で確認できる。河南省数字図書館に所蔵されているものもマイクロ化されており、以下のような説明がなされている。「【作者】薩夏廠編譯，【出版項】開明書店，1903【参考文献格式】薩夏廠編譯，英国革命战史，開明書店，1903」<sup>(46)</sup> また、「英国革命战史 薩夏廠編譯 图书馆借阅」として次の図書館が挙げられている。西北大学図書館・陝西師範大学図書館、渭南師範学院図書館、宝鶏文理学院図書館、吉林大学図書館<sup>(47)</sup> 更に、「英国革命战史 薩尤敌編譯 图书馆借阅」には、武汉大学図書館・四川省図書館・長安大学図書館の名前が散見でき、漢訳『英国革命戦史』の影印本<sup>(48)</sup>があることが確認できる。

漢訳万国戦史訳者一覧表（別表2）

No	巻数	万国戦史	実質執筆者	漢訳万国戦史	訳者
1	2巻	英清鴉片戦史	洪江保	英人強賣鴉片記	湯叡
2	6巻	露土戦史	洪江保	露土戦紀	湯叡
3	6巻	露土戦史	洪江保	俄土戦史	袁嘉毅
4	8巻	普墮戦史	洪江保	普奧戦史七編 附録一編	趙天驥
5	10巻	波蘭衰亡戦史	洪江保	波蘭遺史一卷・波蘭遺史	陳澹然
6	10巻	波蘭衰亡戦史	洪江保	波蘭衰亡史	薛蟄龍
7	12巻	印度蚕食戦史	洪江保	印度蚕食戦史	汪郁年
8	17巻	英國革命戦史	洪江保	英國革命戦史	薩憂敵
9	17巻	英國革命戦史	洪江保	英國革命戦史	薩夏廠
10	18巻	佛國革命戦史	洪江保	佛國革命戦史	蔣維喬

注：第2巻・6巻の掲載執筆者は松井廣吉である。

## 五 『漢訳万国戦史』と出版社

### (1) 清末上海と出版社

初期英国租界には東西に伸びる五本の通りが設けられていたが、それぞれ大馬路（現南京東路）、二馬路（現九江路）、三馬路（現漢口路）、四馬路（現福州路）、五馬路（現広東路）と呼ばれていた。『文人書店から近代的出版機構へ 開明書店の歩み』の中で、四馬路を取り上げ、「一、二十八年の上海四馬路」に趙景深のエッセイ『申報 副刊「芸術界」（一九二九年一月六日）』を次のように引用している。「私の家は閘北にあり、しょっちゅう人力車で駅まで、六路圓路の路面電車で五馬路棋盤街へ行き、書店をのぞき、新しい

本はないかなと探す。おや、足が勝手に動く。まず、亜東へ、それから南に曲がって真善美、真善美書店からまっすぐ行って民智、商務、中華といった老舗へいかねばならない。中華から西がいわゆる書店街の四馬路である。書店がひしめいている。左に光華、楽群、春潮、北新、啓智、右には新文化、現代、群衆、世界、泰東、卿雲がある。これは、左派右派ではなく、光華と現代は洛陽娘のように仲良く隣り合っているし、春潮と楽群の若夫婦は、まだ二階で一緒に寝ている。群衆から北へちょっと曲がると新聞社街であるが、ここにも二軒の書店がある。新月と開明である。数えてみるとあわせて何軒になるかな。十八軒である」<sup>(49)</sup> 同論文には「趙景深はさらに宝興路から北四川路へ本屋めぐりをし、二十八年末で四十八軒の書店が上海にあったと証言している。包子衍は、この証言を元に、さらに考察を加え、六十軒ほどの本屋があったと推測している。」<sup>(50)</sup> と記載がある。

『晚清上海书局名录』には「本文主要依据报刊广告等诸多相关资料，对晚清上海书局的名字及数量进行了统计，发现晚清上海书局至少有四二一个之多，这个资料整理对于晚清出版文化史的研究或有小助。」<sup>(51)</sup> とあり、421軒余りの書店が上海租界に軒を連ね書店街を形成していたことがわかる。同論文には、漢訳『万国戦史』を出版した商務印書館・作新社・廣智書局・開明書店・人演訳社・大同訳書局・鏡今書局・支那翻訳会社の書店の名前が散見出来る。

## (2) 漢訳『英国革命戦史』の版權について

『英国革命戦史』の漢訳版の版權には以下の記載が見られる。「①光緒二十九年閏五月二十五日出版、②編訳者 福建薩憂敵、③印刷所 四馬路東首 作新社印刷局、④販売所 開明書店・新民叢報支店・廣益書室・會文堂、⑤総發行所 英大馬路小榮場對門寿康里 支那繙譯会社」<sup>(52)</sup> 光緒29年は1903(明治36年)に当たる。洪江著『英国革命戦史』が博文館から出版されてから九年後だ。訳者の薩憂敵についてはその経歴は現時点ではわかっていない。印刷所の作新社印刷局は四馬路東首と記載がある。上海で発行された日本語雑誌「上海」について書かれた論文『近代上海における日本語メディアの一考察』にも「『上海週報』(第二次)は一九〇三年(明治三六年)十二月二四日に創刊され、編集人は和田栄次郎であった。このときは、上海虹口

乍浦路三九三号にある上海週報社より発行されていたが、三号より英租界四馬路東首五五にある作新社で印刷した。」<sup>(53)</sup>と作新社について記載がある。

韓韓の論文『清末における下田歌子著『新選家政学』の翻訳・出版について』に作新社について次のような記載がある。「作新社は、下田歌子が中国人留学生と積極的に交流する中で知り合った戢翼翬と共同で設立した出版社である。戢翼翬は、在日留学生団体「励志会」が東京で設立した翻訳・出版団体である訳書彙編社の社長を務め、東京で『国民報』を創刊した経験もある。下田歌子が一九〇二年に戢翼翬と共同で設立した作新社は、雑誌『大陸』を発刊したほか、主に日本の書籍を大量に翻訳・出版した。」<sup>(54)</sup> 戢翼翬は湖北省で最も早く日本に留学した一人で弘文学院で嘉納治五郎について学び、その後東京専門学校（現早稲田大学）に入学している。下田歌子は実践女子大学の創立者で女子教育に生涯を捧げた人物として知られる。

版權には、販売所について四軒の記載がある。『新小説の発行年月日と印刷地2』に上海で創刊された中国最初の日刊紙『申報』と日本留学経験がある狄楚青によって創刊された中国語日刊新聞『時報』の広告に「上海四馬路新民叢報支店」<sup>(55)</sup>が見られる。廣益書室は1900年に設立した出版社で1904年に廣益書局に改名している。日本の出版物として、博文館から1899年（明治32年）に出版された加藤弘之の『天則百話』を翻訳出版している。『晚清上海書局名録』においても廣益書室（廣益書局）が確認できる。会文堂については、国立国会図書館の蔵書や古書店には出版社として会文堂書局（上海）や上海会文堂書局が確認できるがそれ以上のことはわかっていない。

### (3) 清末上海の状況と出版社林立の背景

清がアヘン戦争後のイギリスと南京条約を締結し、イギリスに香港島を割譲、上海開港、列強は上海を支配下に置いてイギリス租界を皮切りに、アメリカ租界、フランス租界を上海に設置し、一大商業地区とし発展隆盛を極めた。

日清戦争後、中国は分割され、所謂、『瓜分の危機』にさらされ、ドイツは膠州湾、ロシアは旅順大連、フランスは広州湾をそれぞれ占領したが、イギリスはロシアやドイツ等の列強に対抗して長江下流域を支配し影響を及ぼ

した。また、中国には列強の外資が多く投入され『中国産業近代化初期における企業基盤 清末期の重工業成立』『中国に近代外資企業の誕生』によれば、「外資系企業はその後、さらに活動重点を広州から上海へ移し、沿岸部及び内陸部の一部都市に中国歴史上初めて外資企業を誕生させた。」<sup>(56)</sup>とあり、上海は外資の対象都市になっていったことがわかる。

新聞社・出版社等メディアにおいても『晚清上海書局名録』に見られるように、多くの書店が上海租界に林立した。上海租界の初期段階においてその中心的な存在だったのは墨海書館である。『日本の近代化と上海 もう一つの開国物語』『一情報発信基地の上海』には「上海ネットワーク」を情報や文化の面から成り立たせていたのは、これらの施設の中の新聞、出版関係であるが、中でも一八四三年の開港とともに設立された墨海書館と一八五九年に寧波から移転してきた美華書院（原名華花書房、一八四四年創立）は特にその中心的な存在だったと言える。」<sup>(57)</sup>とある。

清末上海に新聞社・出版社が林立したのは、上海を中心とした長江下流域が英国の支配下に置かれ、反清メディアが活動しやすい自由な雰囲気を与す土壤が生まれからだ結論づけたい。

漢訳万国戦史書誌情報一覧表 (別表3)

No	巻数	万国戦史	実質 執筆者	漢訳 万国戦史	訳者	出版年月日 (漢訳万国戦史)	漢訳万国戦史 取藏所	出版社 所在地	出版社 創設年	出版社創設者	備考
1	2巻	英清鴉片戦史	波江保	英人強賣鴉片記	湯敏	1898年 (光緒24年・明治31年)	山口大学 図書館他	大同書局 上海	1897年		密啓桐序文、河南省数字図書館・長春数字図書館・中国国家図書館所蔵
2	3巻	拿破崙戦史	野々村 金五郎	拿破崙戦史	湯敏	1897年 (光緒23年・明治30年)		大同書局 上海	1897年	康廣仁	『英清鴉片戦史』(英人強賣鴉片記)の巻末の大同書局各種書目
3	6巻	露土戦史	波江保	露土戦史	湯敏	1897年 (光緒23年・明治30年)		大同書局 上海	1897年		梁啓超序文
4	6巻	露土戦史	波江保	露土戦史	袁嘉毅	1908年 (光緒34年・明治41年)	東京大学 総合図書館	京師五道商務 書局 北京		康廣仁	校改者 伍銓峯 邵振藩
5	7巻	米蘭南北戦史	波江保	美國南北戦史		1902年 (光緒28年・明治35年)	東京大学 総合図書館	大同書局 上海	1897年	康廣仁	『英清鴉片戦史』(英人強賣鴉片記)の巻末の大同書局各種書目
6	8巻	普奥戦史	波江保	普奥戦史七編 附録一編	趙天驥	1902年 (光緒28年・明治35年)	東京文庫	商務印書館 上海	1897年	康廣仁	校改者 東湖王慕陶
7	9巻	ナイル海戦史	越山 平三郎	ナイル海戦史				商務印書館 上海			清史館鑒「晚清西学东渐与新史学的发初」(北京师范大学历史系教授王革新)に『尼罗海战史』掲載
8	10巻	波羅衰亡戦史	波江保	波蘭衰亡戦史 第一冊	東京譯 書堂社	1901年 (光緒27年・明治34年)	東京郡立 中央図書館他	東京譯書 堂編社 東京	1900年	戴翼暉	2012年マイクロフィルム化、『波蘭衰亡戦史第一冊』全国図書館 文獻縮微中心所蔵
9	10巻	波羅衰亡戦史	波江保	波蘭衰亡戦史 (經公収)	薛鉄龍 (經公収)	1904年 (光緒30年・明治37年)	全国図書館 文獻縮微中心	上海綜合書局 上海	1903年	陳養源	2016年の論文に記載
10	10巻	波羅衰亡戦史	波江保	波蘭衰亡遺史 一卷	陳澹然	1916年 (民国5年・大正5年)	国家図書館	江西官報社 杭州			国家図書館古籍館普通古籍閲覧室 鈔印本
11	10巻	波羅衰亡戦史	波江保	波蘭遺史	陳澹然	1902年 (光緒28年・明治35年)		江西官報社 杭州			鄒振環「晚清波蘭亡国書写的演変系譜」(南京政治学院学报2016年)の論文に記載
12	12巻	印度孟買戦史	波江保	印度孟買戦史	汪郁年	1901年 (光緒27年・明治34年)		杭州 譯林館			○第一期洋澤江保《印度孟買戦史》后,因苏州的勵学社称己將其全書完竣,故区域内即戛然而止。《译林》在中国学术界留下 的印记 作者周振鶴、《印度孟買戦史》の完訳版であるか不明。
13	12巻	印度孟買戦史	波江保	印度孟買戦史	汪郁年	1901年 (光緒27年・明治34年)		蘇州勵学社 蘇州	1901年	包天英 汪郁年 戴昌熙	○「書名《印度孟買戦史四巻》作者 日本羽化生、日本瀧江保撰、清汪鬱年譯、版本 清光緒二十七年鈔印本影印」(国学大師)より蘇州勵学社版の『印度孟買戦史』と思われる。
14	13巻	英米海戦史	越山 平三郎	英米海戦史				大同 譯書局 上海	1897年	康廣仁	『英清鴉片戦史』(英人強賣鴉片記)の巻末の大同書局各種書目
15	14巻	伊太利 独立戦史	波江保	意大利 独立戦史		1903年 (光緒29年・明治36年)	全国図書館文 獻縮微中心	作新社図書館 上海	1902年	戴翼暉 下田歌子	意大利独立戦史 縮微品 意大利独立戦史 专著 上海 作新社图书局 清光绪二十九年[1903]

No	巻数	万国戦史	実質執筆者	漢訳万国戦史	訳者	出版年月日 (漢訳万国戦史)	取蔵所	出版社	出版社所在地	出版社創設年	出版社創設者	備考
16	14巻	伊大利独立戦史	波江保	伊大利独立戦史	張仁善	1911年前版	河南省数字図書館	廣智書局	上海	1900年 代初頭	梁啓超 康有為	中国語日本書籍合目録(実藤惠秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯)に掲載
17	14巻	伊大利独立戦史	波江保	義大利独立戦史	商務印書館編譯所	1911年 (重3年・明治44年)	河南省数字図書館	商務印書館	上海	1897年	夏芳地威恩 魏鳳昌高岡地	『晚清西学系漸と新史学的発刊』北京師範大学歴史系教授史革新
18	15巻	米國独立戦史	波江保	美國独立戦史	作新社	1903年 (光緒29年・明治36年)	河南省数字図書館	商務印書館	上海	1897年	夏芳地威恩 魏鳳昌高岡地	辛亥年十月再版(版權)
19	15巻	希臘独立戦史	波江保	美國独立戦史	作新社 中国東 京留学生	1903年 (光緒29年・明治36年)	河南省数字図書館	作新社	上海	1902年	戩翼學 下田歌子	
20	16巻	米國独立戦史	波江保	希臘独立戦史 二巻	中国東 京留学生	1875年~1908年 (光緒元年・明治8年~ 光緒34年・明治41年)	國家図書館	商務印書館	上海			鈔印本1冊、所有題名二巻、載体形態1冊、版本説明鈔印本、出版項に「清光緒間[1875-1908]と記載
21	16巻	希臘独立戦史	波江保	希臘自主戦史		1911年前版		大同譯書局	上海	1897年	康廣仁	『英清鴉片戦史』(英人強實鴉片記)の巻末の大同書局各種書目
22	16巻	希臘独立戦史	波江保	希臘独立戦史	秦福宗	1911年前版		廣智書局	上海	1900年 代初頭	梁啓超 康有為	中国語日本書籍合目録(実藤惠秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯)に掲載
23	17巻	英國革命戦史	波江保	英國革命戦史	薩夏厥 編訳	1903年 (光緒29年・明治36年)	河南省数字図書館 その他	開明書店	上海	1926年	章錫琛 章錫勳	1926年創設の開明書店と『英國革命戦史』を出版した開明書店は異なると思われるが詳細は不明である。清南師範学院図書館・宝鶴文理学院図書館・西北大学図書館・吉林大学図書館・陝西師範大学図書館所蔵
24	17巻	英國革命戦史	波江保	英國革命戦史	薩優敏	1940年 (民国29年・昭和16年)	河南省数字図書館	支那翻譯會社	上海			
25	17巻	英國革命戦史	波江保	英國革命戦史	薩優敏	1903年 (光緒29年・明治36年)	河南省数字図書館 その他	支那翻譯會社	上海			2005年マイクロフィルム化、四川省図書館、武漢大学図書館・長安大学図書館所蔵
26	17巻	英國革命戦史	波江保	英國革命戦史				作新社	上海	1902年	戩翼學 下田歌子	『英國革命戦史』は『晚清西学系漸と新史学的発刊』北京師範大学歴史系教授史革新に作新社出版と掲載されている。
27	18巻	佛國革命戦史	波江保	佛國革命戦史	蔣維喬	1903年 (光緒29年・明治36年)	河南省数字図書館	人壽社	上海			『晚清女性と近代中国』の「第七章 接受過程中的演译」においてフランシス革命期の指導者ロラン夫人を取り上げている。その中で波江保の『佛國革命戦史』の訳が二種類(人壽社と商務印書館)あることを指摘している。
28	18巻	佛國革命戦史	波江保	佛國革命戦史	中国国民 叢書社	1903年 (光緒29年・明治36年)		商務印書館	上海	1897年	夏芳地威恩 魏鳳昌高岡地	
29	19巻	佛國革命戦史	波江保	佛國革命戦史				湖北学生界社	東京	1903年	劉成恩 李書城	『光緒庚寅三月湖北学生界社三期』の「譯成近刊書目」

注：現時点で不明な項目は空欄となっている。

『漢訳万国戦史』は一覧表に記載の他、中国国内の数多く図書館に所蔵されているものと思われる。

おわりに

小論では、清末の状況を踏まえながら、隣国、中国での漢訳万国戦史紹介の意義について分析し、漢訳万国戦史の訳者と日本との関係について検証を重ねた。その結果、万国戦史24冊中14冊が漢訳され、しかも、植民地獲得戦争や独立戦争、革命戦争等をテーマにした特定の万国戦史が漢訳されていることが明らかになった。漢訳された万国戦史14冊中、11冊は洪江が実質執筆者である。これらの漢訳万国戦史のうち、少なくとも5冊は復刻マイクロ化され、なかには、日本のデジタル化に先駆けて復刻マイクロ化した漢訳万国戦史もあり、今なお隣国中国において洪江の万国戦史が高い評価を受けている証左と言える。更に、漢訳万国戦史が大衆演劇でもある京劇の演目の原作本として使われていたことは特筆すべきことである。また、漢訳万国戦史を始め、多くの外国書籍が当時翻訳出版され、出版社が清末上海に林立し、反清メディアが活動しやすい自由な雰囲気や許す土壌が上海にあったことが明らかになった。

注記

- (1) 藤元直樹『洪江抽斎歿後の洪江家と帝国図書館』（参考書誌研究第60号2004年3月）105頁
- (2) 東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』122頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）
- (3) 東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』121頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）
- (4) 孫係『清国人の日本留学に関する一考察』（早稲田大学社会学研論集18 2011年9月）
- (5) 黄興濤『《自省与「他者」明恩溥与清末民国时期的民族性改造话语《中国人的气质》在华传播研究》』（近代文化史研究2007年5月）
- (6) 王鼎『雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動』（現代社会文化研究No.64 2017年3月）
- (7) 黄興濤『《自省与「他者」明恩溥与清末民国时期的民族性改造话语《中国人的

- 气质》在华传播研究》』（近代文化史研究 2007 年 5 月）
- (8) 東京大学の鴉外文庫書入本画像データベース『拙斎歿後』123 頁（頁が付記されていないため便宜的に付した。）
  - (9) 深澤秀男の『変法運動と日本横浜中国大同学校』（岩手大学 ArtesLiberales No.42）52 頁
  - (10) 于海英『清議報及びその周辺』（山口大学異文化研究 10 卷 2016 年 3 月 31 日）50・51 頁
  - (11) 于海英『清議報及びその周辺』（山口大学異文化研究 10 卷 2016 年 3 月 31 日）51 頁
  - (12) 梁啓超『露土戦紀序文』（飲冰室文集之三）（上海中華書局 1941 年）33・34 頁
  - (13) 于沛『中国世界史研究译介时期的俄苏史』（《史学集刊》（长春）2006 年 04 期）ネット検索日 2019 年 6 月 30 日
  - (14) 湯毅訳『英人強賣鴉片記上冊・下冊』（大同譯書局 戊辰三月）大同書局各種書目
  - (15) 中国蔡元培研究会編『蔡元培全集 15 卷』（浙江教育出版社 1998 年 11 月）186 頁
  - (16) 李海『梁啓超研究 その日本滞在期を中心に』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科 2014 年 3 月）15 頁
  - (17) 三沢伸生『明治期の日本社会における露土戦争の認識』（東洋大学社会学部紀要第 54-1 号 2016 年）50・51 頁
  - (18) 袁嘉毅訳『俄土戦史』（京師五道廟售書處 光緒 34 年 7 月）表紙
  - (19) Bai 百科『袁嘉谷』ネット検索日 2020 年 5 月 23 日 張誠、閻秀冬『袁嘉谷先生評傳 紀念袁嘉谷先生逝世六十週年』（《雲南文獻》第 27 期 1997 年（平成 9 年））ネット検索日 2020 年 5 月 23 日
  - (20) 袁嘉毅訳『俄土戦史』（京師五道廟售書處 光緒 34 年 7 月）版權
  - (21) 邢方貴『清朝末任鄖陽知府伍銓萃』（2016 年 11 月 2 日）ネット検索日 2020 年 5 月 23 日
  - (22) 袁嘉毅訳『俄土戦史』（京師五道廟售書處 光緒 34 年 7 月）
  - (23) 邹振环『晚清波兰亡国史书写的演变系谱』（《南京政治学院学报》2016 年第 20164 期）ネット検索日 2018 年 11 月 29 日
  - (24) 譯書彙編社訳『波蘭衰亡戦史第一冊』（譯書彙編社 明治 34 年 11 月 30 日）表紙・版權・小引
  - (25) Bai 百科『陈澹然』ネット検索日 2020 年 5 月 23 日
  - (26) 澁江保撰 陳澹然訂『波蘭衰亡遺史普通古籍一卷』（古籍館普通古籍閲覧室（国家図書館）鉛印本 1916 年民国 5 年）2018 年 11 月 29 日
  - (27) 澁江保原著 薛蟄龍（薛公俠）訳述『波蘭衰亡史』上海鏡今書局 1904 年（全国図書館文献縮微中心（国家図書館）2017 年、マイクロフィルム化）ネット検索日 2018 年 11 月 29 日
  - (28) 澁江保原著 薛蟄龍（薛公俠）訳述『波蘭衰亡史』上海鏡今書局 1904 年（全

- 国図書館文献縮微中心（国家図書館）2017年、マイクロフィルム化）ネット  
検索日 2018年11月29日
- (29) 寇振鋒『『三十三年目の夢』の漢訳本『三十三年落花夢』について』（名古屋  
大学学術機関リポジトリ言語文化論集 2009年10月9日）53頁
- (30) 湯叔訳『英人強賣鴉片記上冊・下冊』（大同譯書局 戊辰三月）大同書局各種  
書目
- (31) 梁啓超『波蘭滅亡記』（飲冰室專集之十四）（上海中華書局 1941年）1～3  
頁
- (32) 豆瓣『汪笑依的新編京劇《瓜種蘭因》』（2019年5月26日）ネット検索日  
2018年5月23日
- (33) 鄒國義『陳独秀早年事遺的新資料』（近代史研究 2003年第2期 2003年）227  
頁
- (34) 毛策『包天笑文學活動側影：編輯生涯述略』（清末小説研究会第15号 1992年  
12月1日）ネット検索日 2018年12月8日
- (35) 周振鶴『《译林》在中国学术界留下的印记』（文汇报 2017年9月29日）ネッ  
ト検索日 2018年12月8日
- (36) 史革新『清史鏡鑒：部級领导干部清史讀本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』  
（国家清史編纂委员会文化部清史纂修与研究中心編）2010年11月 ネット檢  
索日 2018年12月26日
- (37) 実藤恵秀監修『中国譯日本書綜合目録』（中文大学出版社 1980年）500頁
- (38) 『国学大師』 ネット検索日 2018年12月8日
- (39) 夏晓虹『晚清女性与近代中国 第七章接受过程中的演绎』（北京大学出版社  
2004年）193頁 ネット検索日 2018年12月26日
- (40) 叶舟『馆史近代知识群体的典型代表：商务印书馆的“常州帮”』2016年9月9  
日ネット検索日 2018年12月28日
- (41) 史革新『清史鏡鑒：部級领导干部清史讀本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』  
（国家清史編纂委员会文化部清史纂修与研究中心編）2010年11月 ネット檢  
索日 2018年12月26日
- (42) 訳者桂林趙天驥『戰史叢書第一集第一編普墮戰史』（上海商務印書館 光緒  
28年 1902年（明治35年））表紙・版權・本文第1頁
- (43) 史革新『清史鏡鑒：部級领导干部清史讀本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』  
（国家清史編纂委员会文化部清史纂修与研究中心編）2010年11月 ネット檢  
索日 2018年12月26日
- (44) 作新社図書局『美国独立戰史』（発行者 作新社図書局 1903年9月12日）版  
権 ネット検索日 2018年11月29日
- (45) 全国図書館文献縮微中心『英国革命戰史（縮微品）』（2005年）ネット検索日  
2018年11月29日
- (46) 河南数字図書館『英国革命戰史』（1903年）ネット検索日 2020年1月12日
- (47) 河南数字図書館『英国革命戰史』（1903年）ネット検索日 2020年1月12日
- (48) 河南数字図書館『英国革命戰史』（1903年）ネット検索日 2020年1月12日

- (49) 絹川浩敏『「文人書店」から近代的出版機構へ 開明書店の歩み』（立命館大学社会システム研究第22号 2011年3月）111・112頁
- (50) 絹川浩敏『「文人書店」から近代的出版機構へ 開明書店の歩み』（立命館大学社会システム研究第22号 2011年3月）112頁
- (51) 张仲民『晚清上海书局名录』（上海百家出版社 2009年10月版）359～367頁 ネット検索日 2020年4月3日
- (52) 薩憂敵『英国革命戦史』（支那繙譯会社 1903年5月25日）ネット検索日 2018年12月26日
- (53) 楊韜『近代上海における日本語メディアの一考察 雑誌『上海』を中心に』（国研紀要146）2015年11月）235頁
- (54) 韓韓『清末における下田歌子著『新選家政学』の翻訳・出版について』17頁
- (55) 樽本照雄『新小説の発行年月日と印刷地2』（大阪経大論集第53巻第2号 2002年7月）377頁・378頁
- (56) 曹勤『中国産業近代化初期における企業基盤 清末期の重工業成立』（帝京経済研究 第36巻第2号 2003年3月）79頁
- (57) 劉建輝『日本の近代化と上海 もう一つの開国物語』（中国国際シンポジウム 1997年3月31日）201頁

#### 参考文献

- (1) 鄒国義『陳独秀早年事遺の新資料』（近代史研究 2003年第2期 2003年）
- (2) 沢本香子『蔣維喬と日本人 蔣維喬日記』（清末小説 1990年13号）
- (3) 史革新『清史鏡鑒：部級领导干部清史读本中卷 晚清西学东渐与新史学的发轫』（国家清史编纂委员会文化部清史纂修与研究中心編）2010年11月 ネット検索日 2018年12月26日
- (4) 中村忠行『檢證：商務印書館・金港堂の合辦（三）』（清末小説 第16号 1993年12月1日）ネット検索日 2020年5月23日
- (5) 沢谷昭次『『英人強賣鴉片記』をめぐって』（山口大学教養部紀要第17巻 1983年10月）

#### 追記

- ・文中の万国戦史書名に続く括弧内の書名は、漢訳万国戦史を示す。
- ・漢訳万国戦史の訳者、汪郁年・趙天驥・薩憂敵・薩夏厥については、中国の百度百科や中国 WEB サイトで検索したが経歴などが不明であった。

